

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 斎藤祥平

【所属】 (助成決定時) 北海道大学文学研究科後期博士課程

【研究題目】

ロシア人亡命者の民族協和思想ユーラシア主義：ハルビンとプラハにおける受容、利用、屈折の実態

【研究の目的】 (400字程度)

ユーラシア主義とは、1920-30年代のロシア人亡命学者たちによる世界観である。国内外の優れた先行研究が明らかにしてきたように、彼らは1917年のロシア革命後、パリ、ベルリン、プラハ、ウィーンといった地で「ヨーロッパでもアジアでもないユーラシア」というテーゼを打ち出した。また、この思想はソ連崩壊後、ロシア人のアイデンティティの一つとしても再び注目を浴びた。本研究は、1920-30年代におけるユーラシア主義の各地における歴史的意義を解明するプロジェクトである。亡命者によるこの思想は、一国史的観点からはその意義が分かりにくかった。ユーラシア主義者は祖国から追放された学者集団であり、政治的敗残者であったため、特定の国家への政治的影響力を持たなかったと考えられ、従来の研究では思想内容の分析に比重が置かれてきた。しかし本研究はこの思想の受容に着目する。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

ユーラシア主義は戦間期の時代を受動的に「反映」していただけではなく、時代や地域を越えて第三者に参照・利用され、変容や屈折が起きていた。それぞれの地域の歴史的史料、および各地で行われた翻訳と原本の比較を行い、利用、変容、屈折の過程を明らかにすることで、この思想の積極的意義を考察しようとした。

プラハのケースについて述べるなら、ユーラシア主義の思想は、チェコ政府外務省直属の新聞 *Prager Presse* 「プラハ新聞」によって紹介された。この新聞はチェコのドイツ語話者のために出版されていたが、そこではユーラシア主義の人種や民族に関する論文、特に反ナチス的思想を含んだ著作がロシア語からドイツ語に翻訳されるなどして紹介されていた。この新聞は主に2つの役割を持っており、対外的には、ドイツからチェコに流れる反チェコプロパガンダに対抗するための対独措置として、対内的には、チェコ国内のナショナリズム、とりわけユダヤ人を矛先とした愛国的排外主義をコントロールする役目を果たしていた。この新聞そのものの情報を含め、ヨーロッパにおけるユーラシア主義のプロパガンダとしての利用について考察した。具体的には、ユーラシア主義者の一人で言語

学者であった N.S.トルベツコイ(1890—1938)の著作である。彼の論文「人種主義について」(1935)および「インド・ヨーロッパ問題について」(1937)がロシア語からドイツ語に翻訳される際には、タイトルが一部変更されたり、内容が削除されるなどの編集が行われている。ロシア語版とドイツ語版の比較を詳細に行い、新聞側の意図を明らかにした。さらに、トルベツコイは 1938 年にゲシュタポの尋問を受け、直後に死去している。この新聞の掲載によってトルベツコイの著作がドイツ語圏に広まったことも考えられたため、関連資料のさらなる収集を行った。

【結論・考察】(400字程度)

ヨーロッパにおける事例に関して言えば、ドイツのナチズムとの対決、すなわち人種主義に対抗するプロパガンダとしての利用の側面が明らかとなった。つまり、ユーラシア主義者が国を持たざる者ゆえに権力者には無い視点を持ち合わせていたことであり、また、その地域的な広がり背景として周囲の国家から注目されたという事実である。たとえば、人種問題や社会ダーウィン主義、国際的連携といった諸問題がユーラシア主義に盛り込まれていたことは、社会的弱者としての亡命者独自の視点であり、あらゆる地域の国家が共有する社会的、民族的問題を解決するために有用だった。そのため、亡命ロシア人による運動の一つであったユーラシア主義の歴史的意義を示すためには、彼らの亡命地での役割について掘り下げる必要があった。ユーラシア主義の思想をプラハで紹介していた現地の新聞の事例と史料から浮かび上がった、ナチスドイツとソ連の狭間のインテリジェンスとしてのユーラシア主義者の側面についてさらなる検討を行いたい。なお、ハルビンのケースについては、研究成果が刊行され次第、貴財団ホームページにて紹介してゆきたい。